

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

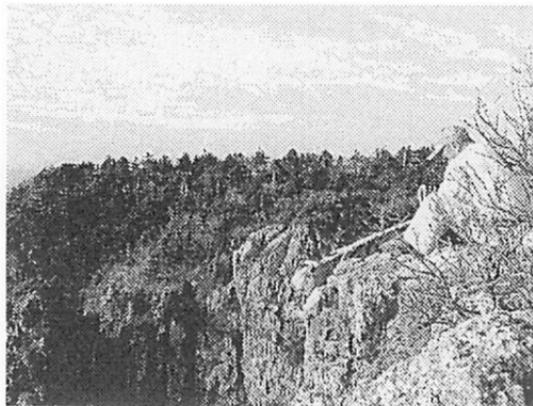
吉野山から五番関まで歩いた後、2001年7月26日から29日にかけて五番関から山上ヶ岳、弥山、前鬼と歩いた。調査員や県・地元市町村関係者併せて総勢延べ19人。今回が踏査の山場だ。

吉野から熊野まで大峰山脈の峰々を歩く大峯奥駈は、その途中に修験者の行場が75カ所あり「大峯七十五驛」と呼ばれる。平安時代後期には120カ所もあり、「宿」と呼ばれていた。ナヒキや宿は、特定の崇拜対象を祀った祠や窟、岩場、滝などの行場や霊地だとされる。本居宣長は「峯中の詞に、一里を一トなびきといひし、大峯の峯

中をすべて七十五なびきといへり」(『玉勝間』)としているが、ナヒキは距離のことで、単に「道」のことだとも言われる。この七十五驛を熊野から吉野へ行くのが「順峯」で、その反対を「逆峯」という。私たちは逆峯で熊野まで到達しようとした。

26日午前10時すぎ、天川村役場に着く。外はやや涼しい。11時すぎから登り始め、五番関で早めの昼食をとり、厩前から歩き出す。正午すぎ、道が崩れてロープと鎖を頼りに進む所で、同行者が谷に落ちかけたが、自力ではい上がった。鉄製の行者像を祀る鍋冠行者、さらに今宿茶屋

跡へ。トリカブトが咲き、秉燭(灯火具)の破片が落ちていた。カッエ坂を登り切ると洞辻茶屋の発動機の音が聞こえてき



断崖絶壁から上半身を乗り出し、祈りをささげる「西の覗き」＝天川村の山上ヶ岳で

た。この茶屋で金剛杖を購入。八角の赤身の杉の長めの杖で、手触りと杉の香りが心地よい。この杖にはこれから大いに助けられることになる。茶屋内の神変堂に掛けられた罫口をみると「天和三年(1683)の刻銘があった。

龍泉寺の宿坊に一旦入り、大峯山寺本堂に参拝。さらに裏行場へ行く。不動登り岩から始まり、胎内くぐりを経て、蟻の戸渡り、平等岩と続くが、夢中で人の後をついて行った。一歩足を踏み間違えると谷に落ちる恐怖で、当時のことはよく覚えていない。夕方、行を終えて龍泉寺の宿坊へ入った。

高さの恐怖 大峯奥駈

(奈良民俗文化研究所代表)